

校長研修だより96

エッセンシャルワーカーとして尽くす

2023・3・10 重枝 一郎

このコロナ禍で、私たちが「当たり前」だと思っていた生活は、エッセンシャルワーカーのたゆみない努力により支えられてきたことを誰もが思った。「当たり前」が「ありがたい」という気付きをした人も多い。そして、やっと顔を見て付き合える「当たり前」が戻ってくる。

私は、我々教師もエッセンシャルワーカーだと考える。私たちの学校は、社会に必要な仕事であり、世の中の日常生活において必要不可欠な仕事を担っている。だから、私は、エッセンシャルワーカーとして尽くすべきだと思うようにしている。

逆に、社会が本校のことを必要としないならば、消えることになる。私は、常々「もし、世界から本校がなくなったらどうなるのかを考える。この地から本校がなくなったらどうなるのかを考える。それが、本校の存在意義であり、社会的役割になる」と思うようにしている。だから「本校だから」「本校ならではの」ということは大事になる。本校が、多くの子どもたちから必要とされるよう、大変な努力を私たちは日々しているのである。

私は学校の危機というのは、現状に満足したり、停滞したりした時に来ると思う。学校がどんなに良い状態でも、数年で危機に陥る。そんな時は、やたら危機感をもつのではなく、改革の意識をもち続けることが大事だと思う。しかし、生き残る戦いでは、結局寂しさや虚しさを味わうことになる。生き残る戦いでは弱すぎるのである。だから今、先生方が前向きに取り組もうとしていることをどんどんやってもらうことが、改革の意識をもち続けるということになる。本年度当初の研修で「多様な改革・小さな行動の積み重ね」について話したのはそういう意味である。

学校の危機という実感として、私自身、困難校の改革を数多く経験した。私は「永遠に荒れている学校はこの世にない！だから予防開発的な先手的な生徒指導を実践しよう」を合言葉に一日一日を乗り切っていた。そして、最善手とは思わず、いろんなことをとりあえずやっていた。その中でも特に荒れた学校に赴任した時は、学力向上の手前の問題行動や授業不成立の問題で忙殺される毎日であった。苦しい胸の内を打ち明ける教師も多い。どんなに熱心に生徒指導に取り組んでも思わぬところで新たな問題が噴出し、状況は一向に好転しない状況だった。教師たちに無力感が漂っていた。そのような始まりであったが、前向きに取り組む空気感をつくることでその状況を脱した。

その学校も当然地域からすると必要不可欠な存在意義をもっていた。つまり私たち教師はエッセンシャルワーカーとして尽くす感覚であった。生徒の実態、人間関係づくり、生活規律の確立の3つの視点から前向きな相互作用を生み出し、生徒の社会性の育成ができるような学校風土づくりに取り組んだ。結果、学力向上にもつながった。

これからの社会をつくっていく若者のために、私たちは何も恐れることなく日々の教育活動で、やりがいをもって取り組んでいく。だから「エッセンシャルワーカーとして尽くす」ということになる。その先に、本校の存在意義・社会的役割が高めることにつながっていく。

一昔前の企業経営と学校は別物である。一昔前の企業は利益を、学校は理念を追求する。一昔前の企業のやり方で、もし本校だけが発展しても社会はよくならないし、存在意義もない。

ちなみに、私がよく言う「自分よし 相手よし みんなよし」という言葉は、昔の商売人の「自分よし 相手よし 世間よし」という「三方よし」を参考にしている。